

## 新刊・既刊の紹介

二〇二一年十一月六日にpict SQUARE内で開催されるオンラインイベント「第三回紙本祭」合わせで、詩集『線を引く』を発行しました。線をテーマにした詩を六編収録しています。二冊目の詩集となります。

今年の二月に「夏の白線」という詩をサイトにアップし、このフリーペーパーの前号に「線を引く」という詩を載せました。どちらも今年書いた詩なのですが、後から読み返した時に「線」という共通したテーマを持っていることに気が付きました。書いている時は無意識だったのですが、もしかしたら今の自分にとってこれが興味のあることなのかもしれないと思い、新刊のテーマに決めました。「線を引く」にはこの二編の詩と、上記の「海岸線にて」も収録しています。

自分と他人を分けるために引かれるものであったり、越えて行きたいけどそれ以上行けない限界であったり、いつの間にか飛び越えていた過去であったり、人と人を繋ぐものであったり。線というものが持つイメージを考えて、それを詩にする時間はとても楽しいものでした。自分にとって、とても気に入る一冊になりました。

ちなみに今年の四月に発行した一冊目の詩集『さよならの予感』はタイトルの通り、別れにまつわる詩八編を収録したものでした。

こちらは二〇一〇年から二〇二一年の間に書いた詩を入れたので、書いた時期はバラバラです。ですが、特に意識せずに八編を選び全体を眺めている時に、すべての詩から「別れ」というキーワードが浮かび上がってきました。そういうわけで、このようなタイトルを付けました。

自分がどんなことに興味を持っているのか、いつも書いた後から気が付くようです。「このテーマで書こう」と決めて詩をつくることはなかったのですが、それでも共通するものがあるんだなというのが新しい気付きでした。今回の新刊『線を引く』で初めて、あらかじめテーマを意識して詩を書いてみましたが、とても新鮮でした。

既刊・新刊共々、ご興味を持ってくださる方がいらっしやいましたら、是非お手にとり取って頂けると嬉しいです。

詩と散文のフリーペーパー

## ひとかけの朝

2枚目

## 海岸線にて

長い坂道を抜けて  
道路が

海岸に向かってふくらんでいく

八月下旬の空を溶かした

海は

しずかに砂浜に打ち寄せて

誰かの時をきざんでいる

浜辺へ降りる石階段に

脱ぎ捨てられた二足のサンダル

若いふたりは冷たい水に足をひたして

手を繋いで歩く

転びそうになった彼女を

男の子が後ろから抱き締め

ふたりは身体を揺らして笑っている

白い太陽の見下ろすさき

潮風があたり

光がひとつぶひとつぶに散らばって

きらきらと

かがやいている

夏の終わりの海のうち

-- ひとこと --

紙本祭さん、紙の本&紙ものオンラインイベントということで、紙好きな自分としてはとても楽しみにしていたイベントです。当サークルの本も、紙媒体で手に取ることの良さを感じられるように、表紙用紙や本文用紙を選んでいきます。イベント当日、素敵な出会いがありますように！

(貝崎)

詩・散文＝貝崎瑞子

2021年11月6日

<https://hitokakenoasa.xii.jp/>



← サイトに飛べます